

RUBeC 演習 I を終えて

別 荘 貴 信

Takanobu BESSHO

電子情報学専攻修士課程 2年

1. はじめに

私は8月20日～9月4日の間、RUBeC 演習に参加した。本科目はアメリカのバークレーで開催され、国際会議でのポスターセッションでの発表を可能にする程度の英語力を身に付けることを目標としている。授業では主に、テクニカルライティングとプレゼンテーションの学習を行う。授業に参加する2週間はホームステイをし、アメリカの家庭の文化にも触れることが出来た。以下では、私が RUBeC 演習に参加して得た経験を紹介する。

2. 授業内容

2.1 一週目

一週目は午前 LSI (English language school) で文法の授業、午後は Jodo Shinshu Center に移動し、授業の復習、プレゼン資料の作成を行った。授業は、問題を解き、先生に当てられたら答えるという日本の文法の授業と似たような形式だった。先生は日本語を話せないネイティブの方だった。雑談に入ると早口で聞き取れなかったが、それでも大筋は理解できた。授業は私たち日本の学生だけでなく、他の国の学生もいた。他の国の学生に比べ、語彙力、文法理解は私たち日本人の方が優れていた気がした。それにも関わらず、彼らの方が圧倒的にスピーキング、リスニングは上であったことが印象に残っている。国による英語教育の違いを痛感した。

2.2 二週目

二週目の午前は事前で作ってあるプレゼン資料を元にネイティブの先生にマンツーマンで発音、文法のチェック、スライド構成のチェックなどをしてもらった。指導を受けるにあたり、自身の研究内容を

大まかに理解してもらう必要があるが、それを説明するのに苦労した。完成したスライドを使い、最終日に5分程度のプレゼンを英語で行った。午後は一週目と同じく、プレゼン資料の作成を行った。すでに終わってやる事が無い人は早めに切り上げ学校周辺を観光したりしていた。

3. ホームステイ

私のホームステイ先は、学校から20kmほど離れたOaklandであった。ホストマザーはとても親切で、特に不自由なく快適に過ごせた。2人1組で配属され、ホームステイ先にはホストマザー1人と既にホームステイをしていた人(日本人)が1人いた。家から最寄り駅までは少し距離があったが、毎日ホストマザーが送迎してくれた。この時期のカリフォルニアは水不足のため、なるべく節水をするように言われたが、シャワーは毎日使え、洗濯も週1回することが出来た。食事については、朝ご飯は時間があれば作ってくれるが、基本的に忙しいので朝は勝手に台所にあるものを食べるというスタイルだった。私はシリアルやトーストをよく食べていた。晩ご飯は、アメリカは量が多いイメージであったが、むしろどちらかと言えば少ないぐらいで、足らなかったらおかわりがもえた。ホストマザーとの会話は正直5割程しか理解できていなかったが、それでも意思疎通はでき、特に問題はなかった。

4. 観光

授業後の午後の時間を利用し、先生引率の元、カリフォルニア大学バークレー校とDonkey & Goat Wineryに行った。カリフォルニア大学バークレー校はカリフォルニア大学の中で最も古い歴史を持つキャンパスである。龍谷大学とは比べものにならないくらい広大な面積を持ち、多様な人種がいたことが印象に残っている。

最初の土日と帰国前の土曜日は自由時間で、最初の土日はサンフランシスコの中華街で晩ご飯を食べ、そのまま近くのホテルに宿泊し、次の日の朝か

らヨセミテ国立公園のツアーに参加した。日本では見られない壮大な自然（図1）を堪能することができ、貴重な経験が出来た。最終日の土曜日は、サンフランシスコ動物園に行き、帰りにサンフランシスコ市内を散策した。



図1 El Capitan の写真（ヨセミテ国立公園）

5. バークレーでの生活

バークレーは学生街ということもあり、サンフランシスコに比べると治安も良く、飲食店やスーパーなど多くの店があった。しかし、ホームレスや薬物中毒者も多くおり、何度か話しかけられたこともあったので、日本ほど不用心には歩けない印象であった。

学校周辺には多くのレストランがあり、昼ご飯は基本的にレストランを転々としていた。日本よりもハンバーガーがおいしく、LSIの向いにあるEureka!やJodo Shinshu Centerの近くにあるSuper Duper Burgersが個人的には美味しかった。

気候は、朝と夜は寒いくらいだった。昼の気温は日本ほど高くないものの、日差しが強く暑かった。日焼け止め、帽子、サングラスは持って行くことをおすすめする。

6. おわりに

RUBeC 演習に参加し英語力が向上した実感はあまり無い。正直、多少耳が慣れた程度である。しかし、英語で会話することに対する抵抗がなくなったのは一番大きい収穫物だと考えている。知っている単語を組み立て、ボディランゲージを交えて話すだけでも十分コミュニケーションがとれることを知れたのは良い経験だった。

最後になりましたがご指導して頂いた現地の講師の方、引率して下さった先生方、RUBeC 演習の開始からサポートしていただいた龍谷大学の職員初めとする関係者の方々にこの場を借りて深く感謝いたします。



図2 集合写真